昭和三十年十二月二十四日第三種郵便物認可
昭和十七年八月二十七日印刷納本
昭和十七年九月一日發行（毎月一回一日發行）
第五百七十號

目次

遺文に於ける五大要義（一）……本多日生
信と行（前篇）……小林一郎
本佛實在の宗教哲學（十五）……河合陟明
人生と信仰……田中道爾
記事
○本部園報　○產報會記　○入帳報告

第四十七年　九月號

統一

財團法人
統一園發行

財團法人 統一團趣旨

統一團ハ創立以來實ニ四十有餘年ヲ經過ス其間內ニ佛祖正眼ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歷史ハ決シテ他ノ追隨ヲ許サヾル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天時會アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ又知法思國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見ン　又著述出版ニ於テハ大藏經要義　法華經要義　日蓮主義精要　聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ヲ超エ雜誌トシテハ每月統一ト敎トヲ發行シ來レリ

統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法勳ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行セント欲ス　其中心ノ事業ヲ擧グレバ

第一佛祖正眼ノ法統ヲ擁護スル事　第二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮スル事　第三此ニ適當スル學風ヲ振起スル事　第四時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事　第五小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文敎ノ爲ニ每ニ覺醒ヲ促シツヽ嚴然トシテ統一ノ學風ト敎化トヲ守持スル事是レナリ

敎旨ノ正明　研學ノ潤達　活動ノ旺盛此等ハ統一團ノ標語ナリ

寔ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適スル敎學ノ特色ヲ永久ニ持續セントスル本團事業ノ翼贊ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ　希クハ同感ノ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法爲國爲一切衆生切に懇望スル所ナリ

本團畧則

□目的　本團ハ日蓮敎學ノ心髓ヲ闡明シテ佛祖正眼ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根柢ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布敎並ニ敎化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌『統一』ヲ發行ス

□維持員　本團ノ事業ヲ翼贊シ一時金參百圓以上又ハ每年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ維持員トス

□贊助員　一時金百圓以上又ハ每年金五圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ贊助員トス

□正團員　一時金參拾圓以上又ハ每年金貳圓五拾錢ヲ納附セラルル方ヲ正團員トス

□入團　御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布ス

□誌友　統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

遺文に於ける五大要義

本多日生

日蓮聖人の書き遺された御遺文の中に於て、法華經の五大要義に關する御文章は頗る數多いことであるが、今その中の極く重要と思ふ部分を少しづつ擧げて、法華經に於ける五大要義の意味合を、御遺文の方から證明して置きたいと思ふ。

一、法華經の卓越

五大要義の第一に算ふべきものは法華經の卓越といふことで、釋尊のお說きになつた一切經の中に於て法華經が最も勝れて居るお經である、吾々の信ずべき敎は法華經に限るといふ意味合を徹底することが、五大要義の第一に現はれ來ることである。その事に就ては日蓮聖人の『持法華問答鈔』のはじめに

大小權實は家々の諍ひなれども、一代聖經の中には法華獨り勝れたり、是れ頓證菩提の指南、直

至道場の車輪なり。疑て云く、人師は經論の心を得て釋を作るものなり、然らば則ち宗々の人師面々各々に教門をしつらひ、釋を作り義を立て證得菩提と志す、何ぞ虚しかるべきや、然るに法華獨り勝ると候はゞ心せばくこそ覺え候へ。答て云く、法華獨りいみじと申すが心せばく候はゞ、釋尊ほど心せばき人は世に候はじ、何ぞ誤りの甚しきや、且く一經一流の釋を引いて其の迷をさとらせん、無量義經に云く、種々に法を說き、種々に法を說くことは方便の力を以てす、四十餘年には未だ眞實を顯はさず云々。

斯う書かれて、何れの宗旨に於てもそれ〳〵の依經を定めて、立派な人達が宗旨を開いたのであるから、どの宗旨もその所依にしてお經は尊いものであらう、然るに法華獨り勝るゝといふやうなことを言ふのは、料簡の狹いことになりはしないかといふ問を擧げて、日蓮聖人がそれに答へて言はれるには、さうではない、法華經が卓越して居るといふことは釋尊の思召より言ふことで、若しそれが心せまいといふならば、釋尊が心せまいといふことになる譯である。法華經の卓越は無量義經に『四十餘年未顯眞實』と說かれて、釋迦如來が法華經に來るまで四十餘年の長き說法にいろ〳〵お說きになつたけれども、未だ眞實を顯はして居らないと自から證明されて居ることである。さうして法華經に於ては『正直に方便を捨てて但だ無上道を說く』と仰せられて居るので、法華經の方は眞實を顯はしたものぢやといふことが明瞭になつて居るのである。

それ故に教相の表面からながめても、法華經の卓越——一切經の中に於て法華經が尊いものだといふことは直にわかることである。併ながら唯だ教相の表面から法華經第一とある、法華經眞實とあるといふだけでは、その御內容實質といふものがヨク判らぬから、日蓮聖人はその內容實質に就て法華經の尊き所以を述べられるのである。それは御遺文のいたる所に、いろ〳〵の方面から法華經の勝れて居る事を仰せられるので、細かく算へ上げれば十も二十も法華經の秀でて居る所以が出て來るのであるが、併しその中に於て日蓮聖人が最も力强く仰せられたのは二つの事柄である。それは『開目鈔』にその點を明示せられたのであつて、一つは「二乘作佛」一つは「久遠實成」と申して居るのである。卽ち『開目鈔』に

大覺世尊は四十餘年の年限を指して其の內の恒河の諸經を未顯眞實、八年の法華は要當說眞實と定め給ひしかば、多寶佛大地より出現して皆是眞實と證明す、分身の諸佛來集して長舌を梵天に付く、此の言赫々たり明々たり、晴天の日よりもあきらかに、夜中の滿月のごとし、仰いで信せよ伏して懷ふべし。

と書かれて、法華經が勝れて居るといふことは晴天の日よりも明かなことで、誰しもこれに對して疑を挿む餘地はない。それを言ひ終るとスグにその內容實質に入つて次の御語が出て居る。

但し此の經に二箇の大事あり、倶舍宗、成實宗、律宗、法相宗、三論宗等は名をもしらず、華嚴

宗と眞言宗との二宗は偸に盜んで自宗の骨目とせり、一念三千の法門は但だ法華經の本門壽量品の文の底にしづめたり。

この一節に現はれて居る「二箇の大事」といふことが、今申す二乘作佛と久遠實成といふことである

「二乘作佛」といふのは、舍利弗、目連等の當時印度に生れた人が、殘らず法華經に於て佛になることを許された、それは唯だ二乘ばかりではない、女人の成佛、惡人の成佛、愚者の成佛、如何なる者でも法華經に於て成佛するといふことを許されるのである。これを人開會の法門といつて、法華經に來れば、他のお經で嫌はれて居つたやうな者が殘らず許されて成佛することになるのである。他のお經に於ては女人の事に關しても、いろ〳〵障りのあるやうな事が現はれて居る、ハッキリはせないけれども日本の諸宗に於ては、禪宗などの宗旨になれば面倒な教へであるから、古來女人にして禪宗の教に依つて救はれるといふやうな人は極めて少い、佛法の教が女人に就てはナニか特別に疎隔をして居るやうに思つて、高野山に於ても女人禁制といふやうな譯で、女は登つてはならぬと言ふ、登つてならぬといふのは嫌はれて居る譯である。さういふ事は非常に間違つたやり方である。女人は穢れて居るといふやうなことを、隨分古來やかましく言つて居るのである、穢れるといふことは罪が重いといふ意味であらうが、さういふ事はない譯である。それは女にも罪の重い人もあり輕い人もある、男にも罪の重い人もあり輕い人もあるので、罪が重いが故に女に生れたといふやうな先天的の關係はないのである。それが法華經の教にはハッキリと現はれて來て、女人の成佛、二乘の成佛といふことになつて來たのである。

これを人開會と申して、今日世間でやかましく言ふ言葉からいへば人格平等の問題である。人格を差別して、或る者は偉いのだ、或る者はアカンのだといふ、チョウド今歐羅巴あたりの人間が、同じ人類の中に於て自分等ばかり優越觀を懷いて、有色人種は劣等なりと獨斷をして居るが如きは、非常な間違つた考へ方であるが、さういふ思想が佛教の他のお經にはあつたのであつて、二乘は佛に成れんとか、女人は佛に成れぬとかいふ、即ち人格の不平等といふ思想があつた。それを法華經に於ては否定して、二乘も佛に成れば、惡人も女人も愚者も十界皆成佛道といふ、人格の平等を說いたのであつて、これが非常に大事なことになつて來る。大體人間には必ず父親と母親とがあるのである、親孝行といふやうなことを考へれば、父親と同時に母親があるのであるから、自分は男に生れても女の問題はやはり男の上にも被さつて居る。むしろ親に對する孝心といふことに就いては、母親の事をヨリ多く考へる位のことである。お釋迦樣も心地觀經に報恩品を說かれる中に、父母の恩に就いては父の恩よりも母の恩のことを强く心に懸けていろ〳〵仰せられて居る、日蓮聖人に於てもやはりさうである。だから自分は設ひ男であつても、孝養心の上からいへば、女人が成佛が出來ぬといふやうな教ではとても滿足し得られるものではない。その事が二乘作佛といふ語に含有して居る人開會の大きな教

である。それを他のお經に於ては明して居ないが故に、そこに大きな缺點がある。法華經はその點に於て人開會をして、一切の者みな平等に佛になることを許した、人格の同じ尊さを示したといふことが、大きな特色になつて居るのである。

モウ一つは『久遠實成』といつて、佛樣の事に就いて眞實を顯はして來るのである、それが顯はれないと、同じ佛敎を信じて居つてもお釋迦樣よりも阿彌陀樣が有難いとか、大日如來が有難いとかいふやうなことになつて、佛法を信ずる中心が判らなくなるのである。それが法華經に來ると壽量品に於て顯本といつて、お釋迦樣が絕對無上の本佛であることを事細かにお說きになつて、少しも迷ふ所なく釋迦如來を中心にして信仰を捧げ奉ることが出來る、吾等の救ひ主はお釋迦樣である、我は子なり、釋迦如來は父なりといふことに依つて、ハツキリお釋迦樣を信ずるところの精神が定まつて來るのである。（その事は後に尙ほモウ一段詳しく述べる）

その二箇の大事といふことを以つて、法華經が卓越して居るといふことを仰せられるのである。だから法華が勝れて居るといふことを言ふ時分には、法華を信心したならば貧乏人が金持になるとか、死んだお婆さんが硬ばつて居つたのが軟かになるとか、さういふ譯の判らぬ事ばかり言はないで、法華經の秀でて居るのは人格平等を明かにして、二乘作佛、女人成佛、如何なる者でも法華經に依れば救はれるのであるといふ事を第一に意識しなければならぬ、それは日蓮聖人が最後池上に於ての訣別の說敎に方つて、人みな父母があるのであるから、惡人成佛の敎が開かれて、提婆達多のやうな惡人すら法華經に依つて成佛が出來て居ることを思へば、汝が父いかに惡人なりと雖も提婆よりは惡人ならざるべし、然らば法華經に依つて汝の父を救ひ得るのである。汝の母いかに愚痴なりと雖も八歲の龍女よりは愚痴ならざるべし、然らば法華經は八歲の龍女をさへ救つたのであるから、汝の母を救ひ得るに違ひない。提婆の成佛龍女の成佛といふことは一切の人々の父母の成佛を保證したものである、故に父母孝養の心から導かれた場合に、眞の孝養を盡さうとすれば法華經を信じなければならない、法華經は內典の孝經なりといふことを說き切つた、それが最後池上で御涅槃なさる時の一番最後の御說法であつたのである。その事を考へると、この人開會の法門といふものが法華經の大事だといふことがスグ判るのである。それからモウ一つは釋尊の顯本の一大事この人開會と本佛顯本といふ二大敎義が、法華經の內容實質として一切經に秀でて居る所以である。

實はこの二つが宗敎の本質である。吾々人間に就いての眞實を明すことと、その信ずる對象の大人格者、卽ち佛樣の眞實を顯はすことの二つがよくわかれば、完全なる宗敎が成立つのである。完全なる國家は、その國家を統率せられる國王の尊嚴聖德が明かになり、それに隨つて行く國民の素質なり善き心懸が明かになれば、それが善き國家であるといふことがわかる。家庭に於て言へば親子の關係であつて、親も立派であり、子も心懸が善いといふことになれば、完全なる家庭が出來る。家の內に

は摺鉢があつたり鍋があつたりいろ〳〵の道具があるから、家といふものはいろ〳〵の物があるものだと思ふかも知らんけれども、そんな物はみな附屬のものであつて、家の中心は親と子である、國家の中心は帝王と臣民である、その心懸のどちらも美しいといふ所に善き家庭、善き國家がある。宇宙の大にして考へても、そこに實在せられる尊き佛と、それを信ずる者の人格の完全といふ二つがハッキリして來れば、そこに善き宗教を生ずる譯ナンである。

それは一切經を研究して見ても、又いろ〳〵世界の宗教學から研究して見ても、日蓮聖人がこの「二箇の大事」と言はれた事が最も重要な問題になつて居るので、それは實に不思議な位である。時を異にし處を異にして、今日は廣く世界的に宗教の本質といふものの研究が進んだが、その場合に最も中心となる問題はやはり今の二つの事である、それを宗教學上に於ては主體と客體と稱して居る、宗教の主體は吾等人間に關する人身觀である、その客體は吾等の信ずる對象たる神、佛を指すのである、この二つが宗教の本質、本體といふものである。その二つの大事な問題に就いて、法華經はどちらも完全に說き切つたところに法華經の勝れて居る所以があるといふ事を領解しなければならぬ。表面から言へば、イキナリ法華經は眞實を說いた教である、他のお經は眞實を顯はして居ない、方便だといふことはスグ判るわけであるが、その內容實質は今申す二つの事柄に於て、法華經が最も卓越して居ると言ふのである。（次續）

信と行

小林一郎

今日はお盆の爲にわざ〳〵かういふお集りを成さつたさうでありますが、お盆のことなどはもう今まで毎年お聽きでありませうから、今更繰返すまでもないことであります。要するにお盆といふことの起りを考へて見れば、恩に報ずるといふ心持から來たのであります。親の御恩に報ずる親の御恩に報ずる爲には、親の苦惱をも救はなければならんといふことが、盂蘭盆といふことの起りであるといふことは、日蓮上人の御書にもありますし、だん〳〵御承知のやうに思ひます。

そこで東洋の道德と、西洋の道德といふやうなものを聊か比べて見ますと、それは何れも道德として敎へられる以上は、それ〴〵價値のあるものでありますが、こゝに特色があると思はれるのであります。西洋の方の道德は大體に於て正義を重んずるといふことが基でありまして、ギリシヤ、ローマ以來西洋では正義といふことを言ふのであります。人間が人間として自分の爲すべきことを完全に果すといふ、これが總ての道德の根本であるといふやうに敎へられます。それでありますから人間は自分の爲すべきことをちやんとやらなければならん。又他の人もそれ〴〵の本分を果せばこれを尊重しなければならんといふことから、正義といふ所を基として人格を尊重するといふことも出て參ります。又約束したことは果さなければならんといふことも、要するに正義といふ思想から應用せられるのであります。正義を基とすれば、自分の義務を果すといふことが根本になる譯であります。所が如何に自分の義務を果すと言ひましても、それが非常に骨が折れ、中々容易でないといふ場合になると、そこは人間でありますから、これだけ骨折つたら宜からうといふやうな一種の妥協的な氣分が起るのであります。それは正義本位の道德といふものでは徹底的に良い

ことをするといふまでに行きにくいのであります。

あなた方はどうお考へになるか知りませんが、今回のイギリス、アメリカとの戰爭でも、それからその前のドイツと英佛の戰爭などでも、いろ〳〵な事實を見ますと中々捕虜が多い。一度に何千、何萬といふ人間が束になつて捕虜になる。それが皆卑怯な、皆つまらない奴かといへば、必ずしもさうではない。中には中々それは智慧もあれば、考へも相當な人間があるけれども、これは義務本位の、所謂正義を基とした道德の缺點を現はして居る譯なのであります。自分はこれだけやる。自分の義務を果す人間として、一通りすべきことをした。これ以上はどうもしようがない。かういふ考へになります。戰さをしても、自分は出來るだけ戰つた。勇氣のあらん限りを揮つて戰つたが、敵がこつちより强ければしようがない。どうなつたつて、爲すべきことはやつたからこれ以上は仕上がないではないか、降參した所が、別に恥かしい所もない。初めから戰さをしないで降參したら恥かしいが、すべきことをやつたから……かういふ考へがあります。この前のヨーロッパ戰爭の時には、日本はイギリスの味方を致しまして、ドイツと戰つたが、ドイツの捕虜が參りまして、九州の福岡とか、東京の近くでは千葉縣の習志野邊りにも居りました。私幾度も參つて見たのです。その捕虜は中々個人としては感心な者も居りますが、別に捕虜になつて恥かしさうな樣子はない。威張つて居る。何故威張つて居るかといへば、俺はすべきことはした、もう軍人としてすべきだけのことはやつて、それでも日本軍はきついから仕方がない、何も捕虜になつたつて恥かしいことはない。かういふ考へがあります。日本なら腹を切る所でありますが彼等は腹を切らないで、生きてて世の中の爲に働くといつて威張つて居ります。さういふことが正義本位の道德の缺點とでも言ふべきものであります。生命を賭けてといふまでには行かない。一生懸命でやるが、それでいけなければそれまでだといふことになるのであります。二、三年前の新聞を御覽になると面白いことがあります。英佛聯合軍がドイツを相手にして戰つた時に、イギリスの將軍はとてもこれは勝つ見込みがないと見込みをつけて、フランス軍を置き去りにしてイギリスに歸つた。そして國へ歸つて勳章を貰つて居ります。負けて歸つて勳章を貰ふといふのは不思議なことでありますが、それはイギリス流なのであります。これはすべきだけはやつた。それでどうもフランスの奴が弱くて助ける張合がないから歸つた。愚圖々々して居ればイギリスの軍隊がやられるといふのでフランスを棄ててしまつたが、自分の軍隊を傷付けない、これは感心だ。將軍として部下を劾ることは宜い。徒らに戰さをするよりも部下を全くして歸つた方が宜いといふので勳章を貰つて居る。負けて勳章を貰つて居る。日本人にはとても想像は付かないが、イギリスの道德はそれで濟んで居ります。それを誰も非難した人もない。詰りそれが正義本位の道德の缺點なのであります。

東洋に於ける道德はそれではない、恩に報ずる。吾々は國に生れれば國の御恩に報ひなければならん。國の君主、日本では　天皇陛下でありますが、日本の如き國體でなくても君主があれば、君主が國を統一して、自分達を治めて下さるといふ御恩は大きいからこれに報ゆる。親の御恩は申すまでもない。一切衆生の恩、一切の人の恩も貴い、この恩に報ゆる。それでもまだ足りないと思ふから、そこで恩に報ゆるといふことになりますと、もう生命はいらん。もうすべきことだけを濟ませたから……そんな冷かなことは考へられない、死んでも足りない。自分の力、心の力を殘らず打込んでもまだ足りないといふ熱情が湧いて來る。だから報恩の爲に骨折るといふことになりまして、本當のことが出來るのであります。もうこれで澤山といふことはない、やつても〳〵まだ足りない。さういふ熱情が必ずこれに伴つて參るのであります。これが日本軍隊の世界に冠絕した所以でありませうが、偖てこの日本の特色を發揮して、戰さに勝つて、そこで事足りるかといふことになると、さうは言へないのであります。

吾々は何もイギリスが憎いからイギリスをやつつけるのではない。アメリカが憎いからアメリカをやつつけるのではない。一體イギリスやアメリカが東洋にやつて來て、我が儘をする根底の思想が間違つて居る。その根底の思想を打破らなければ、イギリスを負かしても、アメリカを負かしても、それで澤山とは言へないのであります。その根底の思想といふのはどういふ思想かといふと、これは十六世紀以來ヨーロッパに養はれた思想であります。即ち十六世紀の初めに於てイタリーの政治家マキアベリが出て、大膽に言放つた、『國際に於ては强き者のみが正しいものと看做される』。これは飽暴な言ひ方です。マキアベリはプランスといふ書物で言つて居ります。個人々々の間では智が、國際に於ては强い者が正しい。その時に耶蘇教の宣教師が群がり起つてこれに反對したのでありました。馬鹿なことを言ふな、神樣の信仰がなくなつてしまふ、これは怪しからんと反對したのです。宣教師が幾ら反對してもヨーロッパの事實がこれを裏書きして居るからしようがない。ヨーロッパでは强い者が正しいといふことになつて居ります。だから强い奴の言

ふことに文句を言はない。弱い者の言ふことは通さん。マキアベリの言ふことは亂暴だが、贊成すべき事實は後から〳〵起つて來る。だから耶蘇教の宣教師が躍起となつても仕方がなかつた。强い者が正しい者と看做される、かういふのであります。だからイギリスは力が强いから東洋にやつて來ては我が儘をした。アメリカも力が强いから富の力に於て世界を征服するだけの物を持つて居るから、富の力に任せてやつたのであつて、獨り英國人、米國人が罪人だと斷言してしまはれるものではない、力で行く、强い者が勝つ。この思想が潰れなければ、假令イギリスが潰れたつて、アメリカが潰れたつて世界は平和になりはしません。そこを能く考へなければならんと思ひます。どうも甚だしきに至つては、チャーチル、ルーズベルトが死にでもすれば世界平和が來るやうに言ふが、そんな馬鹿なことを言つてはいけない。アメリカが潰れても、イギリスが潰れても、力づく、腕づくの通る思想が直らない限りは世界の平和はありはしない。これが思想問題の大事だと言はれる點であります。唯力づくで、こつちの力が强いから向ふに勝つたといふのでは、もつと强い力があればその我が儘を通してしまふことになる。私はこの事をお互ひに、日本人たるものが徹底的に考へなければならんと思ひます。イギリスやアメリカを負かしたら戰さの目的が達成せられたと思つたらいけない。そんな淺間しいことではいけない。戰爭の濟んだ後はどうですか。戰爭が濟んでイギリスもアメリカも負けた。もう一息といふ時に、日本人は戰爭だけで後は何も出來ないといふことになつたらそれは恐ろしいことであります。勝つは勝つたが、後は草臥れた、商賣もうまく出來ない、仕事も出來ない、學問も文學もすつかり駄目になつたといふことだつたら、ちつとも戰さに勝つたといふ甲斐はありませぬ。今度はイギリスが負けても、アメリカが負けても、直ちに有力な國が興つて、もう日本は弱くなつたから東亞に行つて……といふことでイギリスやアメリカのやつた通りのことをやるでせう。それ以上のことをやるかも知れん。さうしたら吾々は何の爲に戰つたか、戰つた意味がなくなつてしまふ。このことを考へなければならん。私など年寄りでそこまで生きてるかどうか知れませんが、若い人に言ふ。戰爭の濟んだ後の日本が弱くなつてはいけない。戰爭後日本が弱つたら、日本くみし易し、日本は戰さをやつたらへと〳〵だ、東洋に於て一番强い日本でさへこの位他愛ない。そこで必ずやイギリス、アメリカ以外の、その時分景氣の良い國が東洋に發展することに全力を注いで來る。その時になつてどうする。日本が弱つたこれを喰止めることは出

來ない。かういふやうなことを程餘考へなければならん。吾々は唯戰さに勝つたら宜いといふことではならないと思ひます。無論戰さにも勝たなければならんが、戰さの後でも日本の國を現實に保つ。戰さが濟んだ後で印度人も、支那人も、南洋諸國の人々をも率ゐて行くだけの實力を今日から養つて、備へて行かなければならん。こゝに於て吾々の責任といふものは實に大きいのであります。唯戰さが濟んだら何とかなるだらう。もう二、三年すればイギリスは食ふ物がなくなるからそろ〳〵降參するだらう。そんな暢氣なことを思つてはいけない。日本のやうに强くて正義の國でなければ勝てないといふことをイギリスやアメリカばかりではない、世界の凡ゆる國が泌々了解して、今後を愼むといふ心持をしつかり固めるまでは、吾々は油斷をしてはならないのであります。假令今日アメリカが講和を言つて來ても、イギリスが謝つて來ても、正義を重んずるといふ眞心が見えないならば、吾々は講和を刎ね付けて宜しい。日本が承知する時は、彼が正義を認める時でなければならない。力づく、腕づくは濟まなかつたといふことを後悔して來る時でなければ日本は相手になつてはならない。これだけの覺悟を持たなければなりません。骨の折れることだが、それだけの覺悟を持たなければ、今回戰さをした意義がないし、又何のことやら分らなくなつてしまふのであります。それで私はさういふことを特に自分の學校の學生に言つて居ります。君達の時が中々大事なんだぞ。吾々は年寄りで死んで行くが、君達が三十、四十になる頃は大變なんだぞ。ヨーロッパの何處かの國が必ず東洋に發展するに違ひない。イギリスやアメリカが退いた後を埋めるものはきつとあるから、その時に日本がしつかりして居なかつたら、彼等の野心が增長するばかり、日本を本當に力强い國にしようといふのは唯皆が眼の前の利益ばかり考へてはいけない。國恩に報ずる爲め、皇室の御恩に報ずる、佛樣の御慈悲の恩に感ずる、詰り報恩の精神をしつかり立てて、さうして自分の一身を棄てるのは物のかずでないといふ心持で萬事をやらなければならん。何の爲に千數百年佛敎が日本に榮えたか意味がない。まだまだ澤山大事なことが殘つて居るから、この際お互ひがこれから後の子孫にまでこの思想を傳へて行かなければならんと思ひます。こゝに信仰の力といふものが現はれなければならんのです。吾々が信仰するのは何も眼の前の利益の爲に信仰して居るのではない。本當に人間の道を辨へて來た時に、皇室の御恩や、佛樣の御恩の大きいこと、國の恩の大きいことを泌々と分つて來る。さうなつて初めて自分達の骨折の意義があります。

一體人間が眞心を打込んでやつたことは朽ちないで後まで續くに違ひない。眼の前の報酬は物のかずではありません。今こゝに水が持つて來てありますが、水で思ひ出すのですが、水道のことは、新宿一丁目の御苑の碑に書いてありますから御承知でありませう。或はお讀みになつた方があるかも知れませんが、德川第二代將軍秀忠の時分初めて水道が出來たのです。それまで江戸は飲料水が遠くて困つた。それでその頃大久保宗太郎忠行といふ三百石取つた御家人があつて、暇があると遠乘りをする。この人は情の深い人でありまして、江戸の人が飲料水に困つてるのを知つて、ある時遠乘りで多摩川の邊、今の小金井の近く、この邊の水は實に清冽で、水量の多いのを見まして、この水を江戸に引いたら江戸の人が助かるだらうといふことに初めて氣が付きました。それから江戸に歸りまして、三百石取り御家人で自分は身分が低いから將軍にちかに申上げることは出來ませんから、組の組頭を經て將軍にそのことを上申した所が、將軍は非常にこれを喜しまして、それでは大久保宗太郎に命ずるが、多摩川に出張して土地の者を募つて、さうして多摩川の水を引く計畫を立てよといふことで、大久保宗太郎は多摩川に出張して、その時分に今一寸調べて見ると丁度小金井の花の時で、百姓を集めて相談を致しました。

そこに兄を清助弟を清衛門といふ頗母しい兄弟があつた、それを呼んで相談を致しました。所が兄弟も多摩川の水がそんな役に立てば結構ですといふので人夫を募り、多摩川の水を江戸に引くことになりました。小金井の花見時、運河を掘つたりして、櫻の花が散ると毒を消すといふ言傳へで、これは御苑の碑にも書いてあります。それから井之頭といふ所がありますが、あすこで檜のとひを引いて、江戸に配つたのです。詰り井の根源である。江戸の井の根源であるといふので井之頭と名付けたのであります。それで辨天樣をあすこに祀つた。それが井之頭の起りなのであります。そんな譯で、德川二代將軍秀忠の時に江戸の一部分に水道が出來ました。その時はまだ人口が、少かつたから間に合ひましたが、後に人口が多くなるに從つて樣々な方法で、又現在では水道の水源地も多摩川だけではなくいろ〳〵ありますが、當時はさうなのでありました。今水を飲んでもそのことを思ふのであります。二百數十年前に大久保宗太郎が發起して、多摩川の水を引いた。その時の多摩川の水はこん〳〵として江戸に入り込んで居ります。私は新宿の向ふに居りますが、私の側で渚溜して、あなた方の家や私の家に配られる。その昔骨折つた百姓達は、子孫が今續いて居る者もあれば、續いてない者もあるでせう。その時使つた鋤や鍬は腐つたでせう。併しその水は續きます。今江戸は東京となりましても、こゝに流れ込んで、皆の生命を繋いで居りますから、百姓の名は分らないでも、家は亡びても、又その時使つた鋤や鍬は腐つても、この水で七百萬の人々が生命を繋いで居るのです。過去に於て人々は働いたが、それは水と共に今も亡びないで、水の中にあるといふことが言へませう。私共は水道の水を飲む場合に感謝して居るものであります。二百數十年前働いた人々の水を飲んで、それに感謝して居るのであります。

これは水道だけの話ですが、總てがさうでせう。吾々が今骨折つて、大いに力を盡して、日本が戰さに勝つのは勿論戰さの後までも榮えて、さうして日本が先へ立つて支那をも、印度をも、南洋諸國をも指導し、さうして正義の國は必ず勝つといふ手本を示して、これに依つてイギリスやアメリカばかりでなく、世界の方々の國が正義の前には力づくでは役に立たないといふやうに氣が付くならば、さうして日本も榮え、東亞も榮え、世界も發展して行くならば、今この際に吾々の骨折つたこの骨折りはやはり朽ちないで、亡びないで何千年も何萬年も後まで傳つて行くものだと考へて宜しい。こゝに吾々の喜びがあります。かくして初めて吾々は積り重なるお國の恩に報ゆることが出來るのであります。皇室の御恩に報ゆることが出來、佛樣の御恩に報ゆることが出來る譯であります。こゝに眼を付けなければなりませぬ。唯小さい眼の前のことに眼を付ければ、それは困難が重なればつひ草臥れる。我慢をしろといふやうなことでは本當のことは出來ない、我慢といふのは限りがあるから、我慢し切れなくなればそれまでであります。苦勞をするのが喜びだ、苦勞の中に御恩報じが出來れば嬉しい。喜びであればどんな苦しい中でも、どんな辛い中でもきつと超へられる。その心持を作らなければならないと思ひます。これは當り前の倫理道德ではいけない。理窟ではいけないのであります。（次續）

天下道有れば、道を以て身に殉ふ。天下道無ければ、身を以て道に殉ふ。未だ道を以て人に殉ふ者を聞かざるなり。

——孟子——

本佛實在の宗教哲學（十五）

河合陟明

十二、一念三千の興廢（承前）

そも〳〵一念三千の構成的論理を尋ぬるに、この具體的・經驗的・現實としての事の常住なる佛界および九界、すなはち迷悟おの〳〵人格としての十界の實在そのものがなくんば、三千といふ法數を成立せしめず。したがつて天台教學の高等批判として、あるひは immanente Kritik 內在的批評として、いはゆる與奪二判の中、もし極度に奪つてゐるひは本體的實在は、常に經驗的存在現象の根據となり根柢となつてゐるものなのであるが、しかも飜つてまた考察するに、この逆の方向の論理もまた成立つのである。

元來、經驗的・時間的・範疇における「無始本有」といふ現象的・具體的實在の概念より、先驗的本體界へ推理する方向を進るとき、まづこの無始本有なる意味に一般的と特殊的、すなはち實在論と價値論とを双べ照す必要が存するのであつて、その歸結はすなはち實在と價値との統一としての意味において特殊的に論ずるところの、價値完成的人格としての佛界の實在性如何の問題に存するのである。しかるにこの中心問題たる、價値の絕對現實なる完全人格の無始本有の實在なるものが成立せざる限り、廣く一般的意味に於て無始本有を論ずるところの隨緣眞如、すなはち十界全體としての常住も互具もまた勿論成立せず、はたまたこれに對してかゝる無始以來の經驗界の根據たるべき、「無作本有」としての不變眞如なる法性の性德三千もまた成立せない。一念三千を要せず、たゞ一念二千七百にて足れり。理によつて事あり、しかしながらまた事によつて理あり、單なる先驗もなく、單なる經驗もない。事理不二・事理一如にしてしかもその歸結は、事を表とし正面とするところに存するのである。天台を始め古今の思想に通有なる、いはゆる理本事迹・理實事權・理體事用ないし法本人迹あるひはさらに法勝人劣といふ如くに考ふべきものではなくして、むしろ事體理德といふべきものでなければならぬ。

すなはち現象的また現實的なる具體的存在、いはゆる現代哲學の一主流たる Existenz 實存在の哲學ともいふ如き實存としての人格そのものを、眞の實在の體と考ふべきであつて、普遍的一般者としての法性の理は、その人格としての事體の內面的具有の德性といふべきである。必ずしも十界の人格が法性の一理より生起しまたこゝに歸趣するといふ如き出入開閉を論ずべきものでない。いはゆる生佛の假名を絕し、迷悟の差別を亡せる眞如海中に、十界の人格的存在を吸收するといふ如き立場に、思想の歸結を置くべきではない。それは未だ却つて抽象的實在論たるか、あるひは尠くとも本體的實在論たるにとゞまり、眞の具體的實在論あるひは事の實相論といふことはできぬ。眞の實相論は十界常住であり、假諸常住であり、色心常住であり、緣起常住であり、迷悟常住であり、したがつて、とくに佛陀については應身常住であり、感應常住であり、救濟常住であることを知らねばならぬ。その初は宇宙論としての諸法實相であり、ゆゑに十法界の三世間の是法住三法位、世間相常住に至り、したがつてさらに己身實相となり、すなはち個體實在論となり、とくに價値的實在たる佛身についてはこれを法色身といひ、「相々實相論」といふ具象的人格の存在に極まる所以の論理的發展を認識せねばならぬ。

かくして十界は常住であり、個體人格は常住である、すなはちそれが常に Existenz 實存在であり、Phänomen 現象であり、wirklich 現實的であり、real 實在的であるのである。しかも問題は實に十界中における佛界の眞の常住性如何に存する。未來常は言はずもがな、佛界は眞に過去常なりや、すなはち眞に無始の實在者なりや。古來幾多の教理研究が蹉跌して起つ能はざるは、一にこの佛界の常住といふ、眞の價値的意味における人格實在の概念を明瞭ならしむること能はざりしによるのである。かくて佛界の實在が一たび立たざるとき、十界互具は中途よりの成立に過ぎずして、一念三千は諸法の實相にあらず。ゆゑに壽量品の久成顯本によつて、本佛の無始實在を證明せずんば、一念三千も破壞せられ、法界の元初は闇々たる無明緣起の妄想夢裡、たゞこれ迷者の集團のみ。盲者の手を聯ぬるも何の爲すところなし。しかのみならずこの無邊の迷者はそも〳〵いかにして開覺救濟を全うし得るであらうか。かく

て二乘作佛といふも、十界皆成といふも、草木成佛といふも、はたまた一性皆成といふも、ないし一佛乘といふも、その佛身の實在確立せずして、畢竟幻影に過ぎず。いはゆる理常はあらず、春つていはゆる影迹常のみ。ゆゑに道統一の眞解決が、Denknotwendigkeit 思惟必然性を以て要請せられて來ねばならぬ。思惟者、正觀也、摩訶者、正境也、眞のノエシスと眞のノエマ、いはゆる立正觀といひ、立正安國といひ、摩訶といひ、觀心といひ、實相といふ、しかもその「事における ein Drittes 第三者・最高統一」、それは果していかなるものであらうか。

十三、本佛論の問題とは何ぞや

今や漸く本佛なるものの（Strukturanalyse）構造分析と（Begriffsbildung）概念構成に入らんとするに當り、そもそもその問題とはいかなるものであるか、しかも古今佛教史上の難問題として、今なほ殆んど（gordischer knot）謎の解きほどされず、今なほ遂に（casting vote）決定投票のなし來られざりし、その問題とは果していかなるものであるか、今まづそれについて一言すべきときとなつた。

古來佛教史上において、佛教正統の立場に立つて、佛教統一を試みたるもの、まづ支那において天台あり、妙樂あり、日本において聖德太子あり、傳教大師あり、日蓮聖人あり、本多日生師あり、然り佛教正統とはすなはちこれを法華經正統の思想的系譜となすのである。これに反し佛教の傍系的立場に立ち、すなはち權經諸宗の立場に立つて、佛教統一を試みんとして果さゞりしもの、枚擧に遑あらずといへども、たゞ現代においてその代表者を擧ぐれば、一は村上專精氏の「佛教統一論」であり、二は島地大等氏の「日本佛教本覺思想の概說」および「佛陀論」である。我が恩師聖應院本多日生上人は、その不朽第一の名著「法華經講義」において、卓然として絕對統一の本佛實在の大教義を唱道せられ、とくにその中心たる如來壽量品の總說にあたつては、破邪顯正双び存して至らざるなく、その三身論より分身論に進むに及んで、果然、當時佛教界中の論敵たる村上專精氏の所論を引用しきたり、以てその分裂隔壓の見解を徹底痛擊せられてゐる。まづ始めには、破邪に先だち、本化別頭の教觀たる一家傳統の顯正說を揭げて云く、

智者大師は諸經に於ては法華の如き分身說なきことを確認せるも、諸佛に各々分身あることを許して、時間上には有始の報身より散影するの義を取りて、未だ無始の應現、絕對の分身を明さず、又空間には有限なる八方の諸佛を指すに止りて、未だ無限なる盡十方の一切の諸佛を總括して、之を分身なりと說かず、從つて積極的統一の本佛を光顯するに至らずして止みぬ。然るに日蓮上人は前に引證せる開目鈔等の聖判の如く、無始盡十方の大化を明して、無始盡十方の所有の一切の諸佛を盡して之を本師釋尊の分身なりと結論し、以て積極的統一の本佛を光揭し給へり、台當釋義の淺深廣狹辨知すべからずや。……

釋迦と大日との關係、釋迦と彌陀との關係、是れ實に佛陀論最後の大問題にして、若し天台の有限的分身論を取らば同體論の下に隱れて、互に中心となるも妨げずとの平等意趣の詭辯を試むるの餘地を存す、故に或は大日中心の統一論を產出し、或は彌陀中心の統一說を派生して、遂に佛教信仰上の救濟主に對する觀念は彼此互に撞着して、永く信仰の純一を期するに由なけん。然るに上人の積極的統一主張に依らば、これ等の見解が壽量品の本旨に背反し、佛教の實歸を紛亂する異端邪說として、之を痛擊すべき所以の理義極めて明了なるを得べし。近時村上專精氏の佛陀論世に出づ、氏は釋迦中心の統一を是認するものにして、その意思筆端に明瞭なるも、他面に大日中心、又は彌陀中心の統一說を許容するが故に、矛盾の無說に陷り、遂に不透明の論旨たるを免れざりき、今參考の爲に氏の所論を摘出せん。

と論じて、村上氏の佛教統一論第三篇佛陀論を引用し、ついでこれを結ぶにたゞ一言のもとに氏の所說を論斷して云く、

予を以て之を見れば、斯の如き矛盾の見解は、適ま以て不統一なる教義信仰の派生を誘起するの論旨に過ぎずして、決して積極的統一の教義信仰を確立し得る所以の確論にあらず、由來宗教は尤も熱烈なる誠意信仰を要するものにして、叨りに寬容を衒ふて、不確實の見解を吹聽するは、人をして信仰の歸着を錯らしむるの矢に止まらず、宗教が世道人心を樽益する所以の本旨をも遺却せるものと謂はざるを得ず、熱誠なる求道の士女は斯る不透明の見解に迷ふことなく、更に進んで彼の大日又は彌陀を以て諸佛の統一主となすが如きは、恰も日本臣民として他國の君主を奉戴する亂臣賊子と一般、釋迦教の根本義を破却する一大僻見として之を叱正痛擊し、偏に久遠無始實在の大恩

教主釋尊を奉戴して、その大慈大悲を渴仰敬讃し、壽量顯本の大義名分を蹂躙すること莫れ。（法華經講義、卷之六四一―五二頁）

と佛教哲理の明析と佛教倫理の尊嚴と佛教統一の斷案とを、萬古不磨の鐵案として決定されてゐるのである。しかるに奇々怪々そも〳〵佛教統一の教觀たる日蓮教學そのものが深遠なればなるほど、古來その門下は幾多の見解に分裂し、敢中佛陀の實體を論ずるにあたつて人格・非人格の論、いはゆる人・法の論は、今なほ解決せられず混沌として混亂雜糅を極め、いはゆる門下の學匠も比々としてこの混亂の渦中に墮在して、しかも互に黑白を爭ひつゝあり、誰か烏の雌雄を知らんや。而してその近世における混沌教學の源流は實に優陀那日輝にあり。彼れは實に日蓮門下、否、近世佛教史上における一種のヘーゲル的 Begriffsdichtung 概念詩の創作者であつたのである。門下現代の學匠も、否、廣くその門內たると門外たるとを問はず、日蓮教學を讃するものも、殆んど彼れの埒外を出でず、彼れの思想を以て日蓮學の代表なるかの如く考へてゐるのである。さりながら彼れの教學は、あだかもヘーゲルの彭大體系の如く、つひに砂上の樓閣たるを奈何せん、いはゆる二途不振たるを奈何せん。こゝにおいてか本多日生師は日輝の本覺論とそれに對する村上專精氏の批評とを、一言に道破して云く、

日輝師の如き佛陀觀は法身的佛陀にして諸經の常談なり、報應の驅本にあらず。村上博士が、人にあらず法なり、日蓮門下人法の論は盲目的闇鬪なりと嘲笑せるも決して所以なきにあらず、本化の學徒この辱を受けて憤起するなきは、道念の消磨を證せるなり。

と、まづ門下に對し、かつ宗外に對して、大警告を與へられてゐる。然るに現代において、同じく村上氏と共に未だ眞乎の日蓮教學を知らずして、しかも日蓮學を批評し、かつ廣く佛教史と佛教界との全體にわたつて、古今の難問として問題を提出しながら、そのみづからもまた實に無解決を告白したるは、かの一世の碩學といはれし島地大等氏であるのである。まづ氏がその佛陀論の最後にかつ論じかつ告白せるところのものを（佛教大綱三四〇――三四五頁）今や予はこゝに引き來つて、以て本佛論の問題を知らしめよう。

第八章　佛陀論の諸問題

第一節　始本二覺

無始久遠の自然覺を承認するや、否や。本來の佛陀の存在を是認するや、否や。とはこれ古來の大問題にして、若しこれを認むることとなれば、因果修證を無視することとなり、佛教正統思想に相反するものゝ如く、果してこれが正統思想に非ずとせば、因果修證によりて現はれたる始覺佛を佛陀論の中心としなければならぬことゝなる。併し乍ら前者は深き哲學的、宗教的要請に立脚せるものにして、佛陀論のあらゆる問題の根幹をなす極めて重要なるものであるだけに、一朝一夕に否定し去らるべきものではなく、殊に最近の宗教思想は、何れかといへば主としてこの本覺佛の信仰に立脚せることを見逃してはならぬ。

第二節　佛體一多

文獻及び美術に現はれたる諸佛は、その根本に於て一釋迦佛の性格を多方面より表現したものであると見るべきか、或は又、それぞれ個別的の存在と見るべきか、未だ明確なる解答が與へられてゐない。密教に於ては釋迦、大日一異の說があり、眞宗に在りては彌陀、釋迦一異の論がありて、本師法王說が行はれ、更に天台は毘盧の一本說に立ち、日蓮は本門一本說に立脚するけれども、この問題は何れも前の始本二覺の問題と密接なる關係があるだけに、それ自身單獨に解決を得らるべき問題ではない。

第三節　內證一異

佛陀の境地に到達したるとき、その體驗の內容と及びそれが世界人類に向つて働きかける活動、即ち內證と外用とは共に同じものであるか、異るものであるかの問題にして、古來、所證平等是一の思想もあるけれども、一方に別

願別行の故にその果相上に區別ありとの說もあつて、俄かに斷定することの出來ぬものである。これ亦前の始本二覺の相異より來る問題である。

第四節　佛果分極

これは佛陀の境界に達したるとき、これ最究竟の境地なりや、更に進展すべき餘地ありやの問題を取扱ふものにして、所請、極證か分證かの問題である。佛教一般の考へ方からすれば自利利他、窮滿せるを佛陀と名づけるから、この立場からすれば極證であらねばならぬ。が併し、二利窮滿は概念としては考へ得ることであるけれども果して實際にあり得るや、否や、自利は究竟し得るとしても、利他の窮滿は可能なりや、古來、分證の佛を認め、果後の修行の有無を論ずる所以も實に玆にあつたのである。若し、極證に達することを餘りに强く主張すれば一種の趣寂に陷るの傾きがあるけれども、然し本覺思想に立てば飽くまで本來成佛、舊來成佛し了れるものでなければならぬ。反對に始覺に立てば成佛完成の時は永遠に來ないといふことになつて、何れも俄かに斷定すべきものではない。

第五節　普門示現

佛陀は全人類救濟のために大活動を起すものにして、この意味からすれば果後修行は永遠に繼續し、玆に普門示現の思想が開展して來る。曇鸞、親鸞の還相回向の說もこの普門示現の一表現に過ぎぬ。又この活動範圍に關して順逆の二門があり、その順なる方面は理解し易いけれども、逆なる方面を如何に說明すべきか、卽ち普門示現の働きとしての愛或は平和等の如く積極的に働く方面はこれを了解し得るも、目的を愛或は平和に置き乍らもその直接方法として、戰鬪或は破壞等の樣式を取るとき、その形式を理想に照し合せて如何に解釋すべきか、これ實に重要なる問題と云はねばならぬ。その一解釋として華嚴では順逆の自在を認め、天台には性惡不斷を談ずる。更に普門示現の內容を說明するに當つて依正示現の思想があるが、自然界までも善或は幸福を賣すとする考へ方は、佛教本來の思想に照して如何に取扱ふべきか、玆にも亦本覺始覺の問題を嚴肅に考究せなければならぬ。

第六節　一佛獨成

釋尊の滅後、一人も成佛せしものなきや、否や。若し無しとするならば、大乘佛教の悉有佛性、或は一性皆成の問題は如何に處理すべきか、更に本來成佛、一念成佛の理想と現實とを如何に調和すべきか等に關しても、これ亦重大なる結果を來すことになる。

第七節　結

以上の諸問題は古來幾多の學者を惱ました極めて重要なる課題であるにも拘らず、未だ嘗て何人もこれに最後的解決を與へたものはない。蓋し佛教は、教理學の研究に先立つて佛陀論の根本的研究がなされなければならぬにも拘らず、その佛陀觀に對する考へが未解決の狀態に置かれてあつたためであらう。今後は本覺始覺の問題を先づ解決し、然る後、そこに佛教研究の出發點を見出すべきである。云云

南無妙法蓮華經

昭和十七年立秋　大詔奉戴日　房州天津　日蓮教學發祥の靈蹟にしるす（つゞく）

人生と信仰

田中道爾

私は子供の時から亂暴者でありまして、宗教の信仰には遠ざかつたものであり、親達も大した信者といふ程ではありませんでした。處が私は中學校時代、十五六歳の頃から、人生とは一體何だ、どうなるのか、人間は何の爲に生れて來たのか、といふやうな疑問が雲の如く湧き起りましたが、自分では何とも解決はつきませぬ。併し事實人は必ず死ぬことは間違ありません。その死んだ先はどうなるのか。此れに關して二三の本を田舍であさり求めました、丁度其頃流行の倉田氏の「出家と其弟子」も讀みましたが、なか〳〵解決は與へられません。遂には一體自分が死んだ先は、どうなるのか、これが理解されない間は、仕事をしても意義がない、即ち一切の努力も、すべての苦勞もこの死の一線を劃して皆亡失してしまふではないか。聖人であつても、偉人でも皆死んでしまふ、いかに學者となつても、文化だ、科學だとやつても、死んでしまへば消えてしまふ、この死の解決が與へられねば、何もする氣持ちにはならぬ。一生懸命に努力しても、それは死の爲に努力するやうなものではあるまいか、全くつまらないことである。それで人に聞きますと、お前さん、今からそんなことを考へるのは生意氣だよ、とか、哲學の詮索をやつたりせんでも宜しいとか、誰も滿足の解答を與へてくれません。

併し私は一生懸命です、朝起きて食事をする時でも、こうして飯を食つてやがては死んでしまふのか、さう思へばモーつまらない飯など食はぬ方が宜いと箸をおいてしまふやうなことになりました。結局神經衰弱といふことになつてしまつたのです。或る時は橋の上で佇んで考へて居りますと、友達が自轉車で飛ばして來ます。捉まへて君何處へ行くのだ、ソーか、併し結局は死ぬんだらう、働いてもつまらないでないか、どうだ今一緒に川へ飛込まふではないかと云ふと驚いて逃げて行きます。こんなことが續いたものですから親達も心配して、これは思ひ切つて旅に出すが宜しからう、他人の飯を食はせば、又氣分も變るだらうと學校を途中で退學して大阪へ出されたのです。さうなると今度は日一日と國許の親が戀しくなつてたまりません、人生は何ぞやといふことより直接親許のこと、兄弟のことが頭から離れません、それに會社で一日追ひまくられますから、宿に歸ればガツカリと疲勞して、モー哲學どころでなくヘト〳〵で眠つてしまふやうな狀態でした。その内にこれではならぬ、モー一遍勉强を仕直さうと思ひまして上京致しました。すると又體に少し餘裕が出來ますと、人生のことを考へましたが、其時佐藤中將の書かれた二三の本を讀んで、始めて日蓮聖人を知りました。元來私の家は念佛宗でありましたが、關らずも日蓮聖人に觸れて大きな感激が湧き出ました。而して善緣に導かれて、本多上人にお目に懸ることになりました。そこで漸く人生といふことに曙光を見出し、死の問題も解決を與へられたのであります。驚くべき因緣果報の敎も聞され、今迄の疑悔は釋然として氷解し、遂に歸正の幸福を得た次第であります。

凡そ私共の見て居ります五十年の人生は、單なる五十年七十年ではありません、始めない始めから、終りなき未來に亘る不生不滅本有常住なんであつて、その生命體の一斷面の一駒が、この五十年の人生といふことであります。然らば其の生命の永遠發展を計るには、どうすればよいかといふ時、そこに正しい敎法を必要と致します。矢張り定道がありますから、此の定道を修行せねばたりませぬ。これは世間に於て一つの會社を經營するにも、經營の道があります。相撲や棋碁に於ても定道、定石があります本筋といふものには、如何なるものにもあります。

宗敎に於きましても、慧心、努力、練磨、定道に加ふるに修行錬成によつて始めて創造が得られます。それですから始めに先づ定道を學ぶべきでありますが、圍碁などでも、弟子入りすれば、あれは眼や耳で覺えるのではありません。弟子は師匠と共に起臥し寢食し、掃除する間に、自然に心から心へと覺えて參ります、そこに苦心も錬磨も努力も加へられる、所謂功を積み德を累ねる所に向上があります。況んや宗敎に於ては定道を學び人格的絶對者に親近し給仕奉行して向上一路、精進すべきであります。

宗敎を學ぶ上には、先づ五大要素といふものを心得ることであります。お釋迦樣の敎には、種々の法說もあれば、聲聞・因緣ばなしなどありまして、それに基いて實踐することになります。所謂菩薩行、六波羅蜜といふ行法でありますが、宗敎の本質といふか、根本原理といふ

ものは、人・理・果の三つであります。それから教・行が說かれるのであります。此の人とは人身觀をいふのですが、それは佛性論となります。理とは宇宙觀であり、果とは佛陀觀、卽ち佛神の問題であります。だから宗教の信仰といふ時は、この三つの本質に照らして見ますと、正邪が明瞭になります。譬へば法華經はどうかといへば、始めに佛性論と宇宙觀が徹底的に說かれて居り、本門に入つて佛陀觀が明確にされて居ります。

凡そ私共が信仰を捧げるといふには、最善の教法でなければなりませぬ、夫には法華經に於て此等をどう教へてゐるか自分はどう解釋して居るかを少しく申述べて見たいのであります。第一人身觀でありますが、自分は何物なのか、これを知ることが人としては極めて大事な問題であります。單に親に生んで戴いた丈けで、賢か愚か、善か惡か、美か醜か、一體何を成すべきか、どうなつて行くのかといふやうなことに就てお釋迦樣は、人間に生れるといふことは決して偶然に父母によつて出生すべきでない、生るべき因緣あり其果報であるとし、本質としては自分と等しい妙體なのであるが、過去の成された業因によつて果報が皆異つて居る、けれ共今度尊い佛陀に遇ひ、妙法を頂いて眞劍に修行するならば、一歩々々自分に近づいて來る、時々刻々に成佛しつゝあるのである、

卽ち最高人格の完成といふ此の大覺心を與へたのが法華經であります。而して宇宙に於ては萬有相關實在の原理を教へて、人々は喜び溢るゝ人生に活き得べきやうに導かれて居ります。その實例は、日蓮聖人の日常を拜すればよろしい。更に進んで佛陀觀に就て、法華經は何と教へて居るかと申しますと、如來壽量品に於て、お釋迦樣は歷史上の人間釋尊でなくして、實に無始久遠無作三身の本師釋迦牟尼如來であり、從つて一切の佛・菩薩等は皆この壽量本佛によつて開顯統一されてしまふのです。これを說き切つたのが法華經であります。

此の佛樣は決して單なる佛として在らせらるるのでなく、そこに幾多の絕えざる功德が積まれつゝあるのですから、お經文を拜見致しましても給仕奉行のことが詳說されて居ります、「法華經をわが得しことは薪こり、菜摘み水くみ仕へてぞ得し」の古歌のやうに、又日蓮聖人は「實に佛になる道は、師に仕ふるには過ぎず」といふ樣に師匠の大事なこと、修行の大事を明されて居ります。人は懈怠に陷り易く放逸に流れ易いのですが、而かも自分は佛子である、佛樣の種を植付けられたものである、何をグヅ〳〵するか、確かり精進せよと激勵されて居るのが、壽量品の本佛釋尊であります。法華經以外のお經では多く理窟の上から、哲學的に教へられて居りますが、

壽量品では人格の如來の光顯に依つて宗教情操の充溢せる處に、私共は大きな感激を新にする者であります。人間いよ〳〵最後といふ時には、眞理がどうだとか、法の上からはこうだとかソンナ文句を捏ねて居る場合でありません、單純にオー世尊よと渴仰あるのみでせう。譬へば赤ん坊の泣く時に、いくら周圍からあやしても駄目です、一目母親を見た時ピタリ泣き止むでありませんか。人生の荒浪重疊の時、ギリ〳〵に追ひ込まれた時、全身を打まけて歸命するには、どうしても人格者でなければなりません、佛樣々々と戀慕渴仰する時、何だ々々といふ感應道交の境地こそ信仰の究極でありませう。如來壽量品には「如來秘密神通之力」を說かれて居ります。「大地は指さばはづるゝとも虛空をつなぐ者はありとも、潮のみちひぬ事はありとも、日は西より出づるとも、法華經の行者の前の叶はぬ事はあるべからず」と、日蓮聖人は仰せられました通り、本筋の信仰であれば必ず私共の願は叶ふべきであります。叶はぬといふのは筋違ひだからであります、これは既に日蓮聖人の實證的であり、幾多事實上にお示しになつて居ります、卽ち伊東の俎岩に於ても、龍口の斷頭刑場に於ても等々枚擧に遑ありません。實に宗教殊に法華經ではこの本佛實在の思想が根本基礎となりますから、此の點が明瞭でないと人身觀に於ても、

單に理佛性で、行佛性の活躍は得られないのであります。日蓮聖人の御書「開目抄」「觀心本尊抄」其他重要な御遺文によつて立證出來、更にこれを現代的に教へられたのが、本多上人であります。本佛人格實在の教は、本多上人の全力を傾けて高調力說された有難い慈海であります。人生と信仰の大事、要點はこゝに在ると存じます。

大宇宙と申しましても、此の悟り給へる佛樣と迷へる一切衆生の住める所でせうから、佛陀の問題が確立しない宇宙觀は、自然論、機械論の冷かなものになつてしまふでせう。壽量本佛の光顯された時、天地法界は睿智の光明に照され、限りなき御功德に包まれた溫かい宇宙となります。法界が雜然たる迷へる九界の衆生ばかりであれば暗闇でありますが、そこに此の本佛の慈愛の膝に抱かれて、すべてが佛樣へと進展して居ります相、それが本佛の圓慈觀と申すのであります。法華經藥艸喻品には「如來の說法は一相一味なり、所謂（生死）解脫相、（偏空遠）離相、（自他離）滅相なり。究竟して一切種智に至る」とあり、又「我はこれ如來、（智德）兩足の尊なり、世間に出づること、猶大雲の如し、一切の枯槁の衆生を充潤して、皆苦を離れて安穩の樂、世間の樂、及び涅槃の樂を得せしむ」とあり、壽量品には「以何」の大悲「每自の悲願」が擧げられて居り、感激なくして拜誦されな

い大慈大悲であります。

結論として申上げたいのは、本佛が當住で在します、又自分が佛子の自覺に立つたばかりではならないと存じます。竿頭百尺更に進んで行に移されねばなりません。そこで日蓮聖人の觀心本尊抄の結文にある「佛、大慈悲を起して五字の内に此珠をつゝみて、末代幼稚の頸に懸けさしめたまふ」といふ唱題修行、それは壽量品の良醫治子の譬喩に基いて、一念三千是好良藥の南無妙法蓮華經を受持口唱すべきであります。險しい人生の山坂も妙法五字のお題目を金剛杖にし、荒い浮世の波風も五字一音のお題目を船筏として突進すべきであります。物識りとなり、いくら理窟を知つてゐても、それ丈けでは幸福な人生の日常は送れないでせう。前に申した通り、本佛といつも起居を共にして居るといふ時に力强い有難味を感じます、そこに法悅、安心の確立を得る次第であります。歩々念々本佛を渴仰し、佛子の自覺に起ち救濟の網を放さず南無妙法蓮華經と唱へて、その法悅の中より皇運扶翼の顧行を立てまして大目的に向つて勇精致したいと存じます。

南無妙法蓮華經

團費誌料維持費及寄附金領收（自七月二十一日至八月二十日）

一金四圓八十錢也　門司　河瀨由子殿
一金二圓五十錢也　松江　高田賢造殿
一金二圓五十錢也　千葉縣　川村驥善殿
一金一圓二十錢也　東京　本郷常丈郎殿
一金八圓八十錢也　同　永島三郎殿
一金五　圓也　同　東　泰子殿
一金五　圓也　同　星野純義殿
一金二圓二十錢也　愛知縣　藤田正雄殿
一金二圓五十錢也　横濱　杉本光衛殿
一金二圓二十錢也　東京　俵　藤照殿
一金五　圓也　同　飯塚辨臣殿
一金二圓五十錢也　奈良縣　渡部登美殿
一金一　百　圓也　東京　野間儀十郎殿
一金二圓二十錢也　同　甘樂清吉殿
一金五　圓也　同　鈴木うた子殿
一金二圓五十錢也　同　納富康之殿
一金三　圓也　横濱　原由字殿
一金五　圓也　千葉縣　山田平八殿

右難有入樣仕候也　（以是領收證代用）

財團法人統一團會計

記事

本部團報

大東亞に於ける新秩序の確立には、道義に立脚すべき當局の意向を體し、本團では八月四日より七日迄の四日間、毎晩六時三十分より九時頃迄、信仰報國第五回の夏期講習會を開催して、先づ我が國體の本義を明徵にし、神儒佛三教の精髓を講述し、以て我國精神文化の體系を知悉せしめ、進んで法國冥合より人生と信仰の妙味に及び、最後日蓮主義の要旨をそれ〴〵權威者の講讃に依つて滿足せしめられた。

由來御國體の登攀を隨喜するのあまりに、排他孤立的に傾き易いことは、心ある者の警むべき點である。惟神の大道は申迄もなく、自主包容の體教であつて決して固陋な獨斷專橫のものでない。明治天皇様が、明治元年三月五ヶ條の御誓文にも『智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スベシ』と仰せられ、國民の往くべき道を聖されて居る。世界思想大系は、我が皇道と道德と宗教が鼎立する處に存せることを想ひ、これが悉く此の日東神洲より光被さるべきを無上の歡とするものである。

世間には我が信ずるものを絕對視して國家を輕く視たり、或は迎合的に御國體を持上げてみたり、或は御國體の影に隱くれて野望を充さんとしたりする者も無いではないが、彼等は心から御國體の本義を信解せないからであらう。學ばざるの致す處で、こゝに『民を導くの本は敎化に在り』と仰せられた御勅に合掌する。又畏くも天照大神様の『思兼神ハ前ノ事ヲ取リ持チテ政セヨ』との神勅は、天皇様の命によつて政に當るものとの關係を嚴としてお示し遊ばされたものと拜されるので、中朝事實には、「蓋し思兼神は、神代思學創聖の神乎、思は兼るに在り、兼ねざれば則ち思ひ隨說に有り、然らば乃ち思ふとは、内に其の知慮を致し、兼るとは、外に其の事物を盡すなり」と述べ更に又「此の間に力行あり、累積あり、近本あり、遠徹あり、諸を天地に建て、諸を鬼神に質すに有り」と說かれて居る、これを鬼神に質すに有りといふやうなことは後人の深思すべき大事である。（鬼神といへば、惡鬼羅刹のやうに直感するものもあるが、鬼は陰の神をいひ、神は陽の神で皇竟神明と申すことである。用語は時代に依つて相當の變遷あることを辨へないと事を謬るであらう）。

道德の敎は、初め儒敎に依つて傳へられたが、我が國に於ては支那式そのまゝでなく、實に忠孝一本の道德が實踐されて來た。これは獨り儒敎だけでなく、宗敎に於ても然りで、佛敎は決して印度佛敎でも南方佛敎でもなく、日本佛敎であり、基督敎も日本基督敎である。譬へば健康體の人が、軟硬精粗の食物でも口にすれば、悉く榮養價を發揮するやうなものである。

「國をおもふ道に二はなかりけり軍の場にたつもたゝぬも」の御製を拜し、億兆一心、皇孫御降臨當時の諸神の御精神即ち我等祖先の遺風をそのまゝ、大御心を奉體して、明淨直の誠心を捧ぐる處に世界の新秩序は樹立さるべきを信ずる。お互日蓮門下の志ある者は、理窟より今は一人でも實行の範を示すべきである、言ふ前に既に行つて示すことに進みたい、誤あらん者、我を見よと呼びたい。

南無妙法蓮華經

野間平次郎翁長逝

ドンドコ法華から歸正して五十年以上、明治廿五年の春、淺草に驛本宗學會が創設されて幾何も經ざるに、本多上人や小林家庭講話に影の如く慕從され、其後山名、小西の二師から現在に及び、晩年は宗學會の最高幹部であるのみならず、本團の賛助員として積功累德の宗貴的野間翁は、七月末に不圖したことから就床、一週間たつか經たぬ八月六日、眠るやうに靈山往詣されてしまつた。享年七十八歳、法號

本持院友祝日法居士

かゝる長老を喪ふことは、單に門下の痛痍ばかりでなく、實に思想上からも大きな損耗であることを想ふ。若人の二陣三陣續かれんことを切望する。

勲御遺族から本團へ金一封御寄贈たまはつたことは、益々國民教化に精進すべき渝で、宜しく止暇斷誤最前線に進擊し、耶かでも翁に喜んで戴きたく起ふ。南無妙法蓮華經

守屋貫教師遷化

立正大學々長であつた守屋師が、八月九日遂に遷化された。節學强信であり、本多上人と其本尊觀に於て同一の人格中心論を以て、專ら修行に重きを置かれ、自ら法鼓を擊つて唱題三昧に過さるゝ事も屢々あつた。温厚實直、靜無き宣言實踐の師であり、本誌にも本多上人の滅後時々御清稿を與へられつゝあつたが、かゝる時局に六十二歳を限りに化を他土に遷さるゝことは寔に名殘り惜しい極みである。殊に先年慈母を喪はれた愛孃等の健氣のお姿に嗣ぶ、けれ共師子は仔を千仞の斷崖から讓落すといひ、歸身は吾等衆生に善根を生ぜしめんと潔勢の雲にかくれ給ふたことから、翻て憶ふ時に、その慈愿の有難いことに感慨興起せしめられる。

經曰、善知識は是れ大因緣なり、所謂化導して、佛を見、阿彌多經三藏三菩提の心を發すことを得せしむ。

南無妙法蓮華經

酒悅立正產業報國會記

今年の夏は例年に較べて暑いやうな氣がして居たので、八月の第一日曜日は誰も洗心莊へ行きたがつて居た。たまたま日曜日も近づいた或る日。會長から洗心莊へ行くなら大山へ登つて見たら何うかと云はれたので奮ひ立ち、直ちに計畫へ取り掛つた。

大山といへば、關東に住んでゐる者ならば一度は上らねばならないと云ひ傳へられてゐる。海拔一千二百米餘、古來關東の靈場として有名で、山上には阿夫利神社、大山寺があり、前者は祭神天皇の御代に創祀され大山祇命を祀り、武の神開運の神として登祭され來つた。大山寺は聖武天皇の御代、僧良辨の開基にかゝり不動明王を祀つてある。山頂は眺望峰大を極め、關八州を一眸に收むるといふから一同が食指を動かしたのも無理はない。

八月一日、土曜日、仕事を早目に切り上げて新宿驛小田急線三輛連結の電車が發車したのは午後六時半。

七時四十分伊勢原驛に降りたら、よい工合に一同自動車へ乘れた。

午前一時出發する豫定で居たが、一時間繰り上げて零時出發にした。從つて疲た人は殆ど無かつたやうだ

零時、御衣に身を堅め杖を手に坊の前に集合、神主の大祓を受け、御題目を大唱し、庭前で記念撮影をなし、數限りない石段を踏んで山に上つた。

大山といふ處は、參詣人の多いだけにケーブルカーのある所までは洵によく設備が行き届いてゐる。石の階段が整然として居り、途中電燈が明るく道を照してゐる。

大山は見やうによつては富士山より登りづらいといふことも聞いてゐたが、來て見ると岩の多い險しい山で、その點で成る程と首肯けた。しかし幸なことに、その晩は月明だつたので、月の光りをたよりに山を登つた。

月かげのかそけき光たよりして岩根高山踏み分け登る

そゝり立つ岩根踏みしめ一歩々々登るこの山は岩多き山

山が險しいので、登山者は全身汗まみれだ。借りて來た御衣が汗で絞れる程になつたので裸になる。

流れ出づる汗とめがたしとかり立つ岩根高山よぢ登るとて

途中一同ケーブルカーに乘る。ケーブルカーは上る時は後方、降りる時は前方に乘つてゐれば登な傾斜のために云ひ知れないスリルを感じる。峰の上の月が皎々として美しかつた。

そゝり立つ山腹のぼるケーブルカーの窓にかゝれる夜半の月かげ

おし照れる月かげ涼し山々の嶺もさやかに見え渡りつゝ

ケーブルカーを降りて山上までの路は甚だ險しかつた。うつかりすると岩に躓く。氣が氣でない。勇氣を落さないやうにと太鼓を打つ。遂に太鼓は頂上まで打ち續けた。

大山阿夫利神社は、前記のやうに武の神であられる。我々は山頂に達した時、心から戰慄を祈らずには居られなかつた。

神在すかしこき宮は山の上の雲の奥にぞ鎭まり給ふ

山頂へ達したのは、二時頃でもあつたらうか。先づお宮の前に整列して恭しくお題目を唱へ祈願した。我々の後からも夥だしい人數が登つて來たが、不思議な事に宮前で參詣する者は殆かつた。これは何かの理由によるものであらうか。是等の人は單なる登山のために來たものか、孰れにもせよ遺憾に感ぜられた。

御來光までは、まだ二時間以上もある。暫く休みたいと思つて、軒の下に莫蓙を敷いて眼を閉つたが、夜氣が冷たくて眠れなかつた。餘り寒いので背中合せにしたりした。

御來光拜むまではと頂の宮の軒下にこゞまりて伏す

御來光の時刻なれば、一同整列、太鼓を打ち鳴らす。暫くして會長導師の下にお勤めをなす。丁度お勤めが終つた頃に東天明かに朱のやうな御來光を拜することが出來た。

御來光迎へまつると高らかに經誦しまつる山の頂

八百雲の棚曳く中に今したゞ日の大神は現れ給ふ

八百雲をおし分けのぼる天つ日の神のみすがた輝き渡る

八百雲をおし分けのぼる日のごとくすめら御國の日に榮え行く

御來光を拜し、感激して山を下る。下つて見ると暗い中に昨夜登つたこの道がいかに險阻であつたか分つて驚く。第一日曜日の事として登山者が多い。

月の光たよりに登りしよべの道の險しさに驚く山下りんとて汗かきて登りし道も風立てば今朝は涼しく山おりきたる

大山に詣づる人のたゞに多く山の阻路みちの狹しも

何といつても下りは樂である。足許が危くない限り周圍の景色を觀賞することも出來る。谷底にかゝつた瀧など眺めると思はず涼味を感じ山登の樂しさが湧く。

谷合の蹭きところに瀧かゝり白々見えて涼しき朝かも

山の水は冷たかるらんむすび飲まば身も凍らなん眞清水これは

岩走る谷の眞清水くむひまもなくて山路いそぎて下る

山を下りて坊に入り、風呂で身體を洗つて朝食を待つてゐる間の心安さ、新ういつた境地は求めて得られるものではない。一つの法悅の境地である。

山くだりのびのびと寝て飯を待つ安けき心誰か知るらめ

山下りて物は思はずあほ向けに安けく我の寝ねてあるかも

汗に濡れし衣はぬぎて天地に裸となりてあほ向けに寝る

大山といふ所は實に水の多いところである。山を降り切つて民家に入つてもまだ通の片側には水が滾々と走りつゞけてゐる。これを民家の人は用水にしてゐるらしい。

大山は水多きところ道の端を盛り上りもり上り清水たばしる

自動車で伊勢原驛まで行く。伊勢原驛で乘り替へて平塚までバスが行くが、その間餘り暑いので一杯氷屋へ入る。

驛から山へ行く人の混雜の仕方は東京でも見られない位だつた。あれではぶつつかり合つて山も登れないではないだらうかと無駄な杞憂が起る。お蔭で平塚行のバスも中々出ない。暑い中に列を作つて立つた場句やつとバスに乘る。

バスは豐饒な綠の稻田を眞を切つて通り抜け、雖て平塚驛に着く。平塚驛の乘替は待つ間もない程だつた。自動車の中もゆつたりして大磯の洗心莊へ着いたのが豫定より少しは遲れたがひる前であつた。

洗心莊では御賣前でお題目を三唱した。少し休んで海へ行く積りで居たら皆元氣がよい。休む者は殆どない。皆海へ行つて終つた。

大磯の夏の海はいつもながら美しい。黑鯛を釣る釣人も澤山出て居て何一つ變つたものもないやうだ。珍らしく波が靜かである。皆で海へ入る。

一年振りで入る海の懷かしさよ。今年も海へ來られて有難い。輕く潮に浸つて私は感傷的にさえなつた。私は天地、先師先輩、否總てに對し感謝捧げるばかりであつた。

夏の海はぎらぎらと光つて如何にも男性的である。砂原の藍のやうな淺い水の色、白い鷗の群、燒け切つた砂。私はいつまでも感傷的にならざるを得なかつた。その場句遠い南國の故郷が目の前に浮び、皓白だつた少年の日の思ひ出さえ湧くではないか。身きは偉大なる自然である。

ぎらぎらと夏日かゞやくおほわだの淺き潮水に浸りて泳ぐ

磯に聞る山なす波を乘り切りておほわだの中を沖へ沖へ泳ぐ

おほわだの神のこゝろはあたゝけれ潮の温みに浸りて涙す

おほわだの大き心に浸り入りてねもごろにわれ泳ぐうれしさ

打ち寄する大波の上にゆつたりと乘りたるまゝに岸へと上る

泳ぎ疲れて晝飯を食べる。食後は輪投げ、ピンポン、野球の練習等思ひ〳〵の藝技をした。夕方濱で地曳網を曳くといふので、夕飯のおかずを貰ふ積りで大擧して網を曳きに行く。

地曳網を敷く船が、磯から程遠からぬ所で網を投げ入れてゐる。地曳網についた綱が左右に大きく擴がつて、ポツンと浮いてゐる。我々は網を曳く。たゞ何の考へもなく網を曳いてゐる。夕日が赤い。嗚呼新ういつた長閑な風景が何處にあるだらう。これが浮土とでもいふだらう。作意のない生活、大自然と溶け合つた生活、是を無爲といふのであらうか。一體日常の生活の上でこんな愉快な時間があるであらうか。いや實は目の前に厳然としてある。あるにも拘らず我々はそれ等の生活を殆ど忘れてゐる。しかし我々はこの感激をその僅日常に移すべきだらう。穢土の中に浮土を建設すべきであらう。地曳網を曳きつゝ私の思ひは遠く靈鷲山へ飛び、佛を慕ふこゝろで一杯だつた。

地曳網大きく敷ける船一つ波の上にあり漕ぎ歸り來る。

今年の夏は、初めて洗心莊に產業報國會員の家族並に關係者の練成所を設けた。初めての企てゞ餘りよい結果は得られなかつたが、この種の企ては重要なものであるから今後研究して物にしたいと思つてゐる。

大詔奉戴日、月曜會、金曜會の記事も書くべきだが、紙數が無いから割愛する。（二郎記）

本多日生上人著書特價提供

聖語錄　改版特價　金壹圓九拾錢

法華經要義　賜天覽　同　金貳圓五拾錢

日蓮主義心髓　同　金壹圓五拾錢

日蓮主義精要　同　金貳圓九拾錢

法華經要品　同　金五拾錢

本尊意識に就て　同　金貳拾錢

法華經の心髓　同　金壹圓五拾錢

黎明の原理　同　金五圓　送料實費

磯部講師著

本多日生上人　特價　金壹圓七拾錢

動行作法　同　金拾錢

佛教の心髓　同　金壹圓　送料實費

河合陟男著

皇道と日蓮主義　定價　金壹圓　送料實費

東京市小石川區音羽町六ノ十七

財團法人統一團出版部

振替東京九四二〇番

統一定價

一部　金拾錢　送料壹錢

半ヶ年　金壹圓貳拾錢

一ヶ年　金貳圓貳拾錢（送料共）

注意

○御申込（總テ前金ノ事）

○前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可

○我候

○時鶴居ノ場合ハ必ズ新聞紙ニ御通知ノ事

昭和十七年八月二十七日印刷納本

昭和十七年九月一日發行

（第五百七十號）

東京市小石川區音羽町六ノ十七

昭料金

發行人　磯部滿事

東京市四谷區內藤町一

印刷人　山田英二

東京市小石川區音羽町八ノ十一

印刷所　野島好文堂印刷所

電話牛込六九六六番

不許複製

東京市小石川區音羽町六ノ十七

發行所　財團法人統一團

電話牛込五三三六番

郵貯東京九四二〇番

東京市神田區淡路町二丁目九番地

配給元　日本出版配給株式會社

統一

昭和三十年十二月二十四日 第三種郵便物認可
昭和十七年九月二十七日 印刷納本
昭和十七年十月一日發行（毎月一回一日發行）

第五百七十號

第四十七年 九月號

昭和三十年十二月二十四日 第三種郵便物認可
昭和十七年九月二十七日 印刷納本
昭和十七年十月一日發行（毎月一回一日發行）

第五百七十一號

目次

得定者心則不散……本聖院
遺文に於ける五大要義（二）……本多日生
信と行（完結）……小林一郎
本佛實在の宗教哲學（十六）……河合陟明

記事

○本部團報　○福島教信　○入帳報告

第四十七年　十月號